

Center News

センターニュース

March
2010
No.13

愛知大学三遠南信地域連携センター

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業



CONTENTS

- 卷頭言…1
- センター事業の取り組み状況…2
 - ・最終報告書のとりまとめに向けて
 - ・地域連携型GISの取り組み報告「地域づくり情報システム整備事業」まとめと今後の展望
 - ・2009年度地域づくりトータルシステム開発事業報告
 - ・教育・人材育成事業報告
- センター・トピックス…4
 - ・公開シンポジウム「GISが育てる人材とは-大学・地域・国際協働-」を開催
 - ・『三遠南信地域づくり読本』の刊行
 - ・生物多様性条約COP10へむけて加速するESD:「COP10・グローバルESD対話集会」

- ・東栄町東薗目地区との交流会
- ・地域づくりサポーター活動報告会を開催
- ・2009年度共同提案事業報告会を開催
- 地域づくりサポーターの活動から…8
 - ・駄菓子屋「だがしかん」の活動を終えて
 - ・野菜販売活動を終えて
 - ・ときわ通りPRイベント～キャンドルナイト in TOYOHASHIを開催して
 - ・『学生の地域創造 IN NARA』に参加して
- 三遠南信地域連携センター活動記録(2009.11～2010.3)…11
- 編集後記…12

◆卷頭言◆

連携センター5年の総括



早いもので三遠南信地域連携センターが立ち上げられて5年余りが経過しました。連携センターではこの間、文科省の競争的資金を獲得した研究プロジェクトを実施する一方、他方では地域貢献のための地域づくり支援事業も行ってきました。2010年3月に補助金事業が終了するので、そこで連携センター事業に一区切りをつけることになりました。文科省へのとりまとめが残されているため、2010年6月末まで連携センター自体は残りますが、その後のことは未定です。現在、文科省への新たな補助金申請をしており、その可否(4月上旬には判明の予定)を受け、改めてその後のことを検討するというのが大学の方針です。したがいまして、これまで連携センターが担ってきた連携の窓口も、原則、「企画・広報課(大学広報係)」で対応することになりますのでよろしくお願ひいたします。

さて内輪の事情はともかくとして、地域連携という観点から、連携センター5年間の総括をしてみたいと思います。ここでは「地域づくり支援」「人材育成」の二点に分けてまとめてみましょう。

地域づくり支援に関しては、三遠南信エリアの各地域に対して、関わり方に濃淡が出てしまったことは否めません。本学と包括協定を結んでいる市町

三遠南信地域連携センター長 岩崎 正弥

等や中山間地域に重点が置かれ、そうでない地域との連携は不十分でした。おそらく今後は、教員の研究や学生の教育の場として地域に協力依頼をしたり、逆に行政課題の具体的な解決を大学が委託されたりというような連携ではなく、大学・地域がそれぞれの課題を持ち寄り討議できるフラットな場としての「協議会」を立ち上げ、そこがコーディネートして事業を実施できるような連携が必要になるのではないかでしょうか。

人材育成に関しては、コミュニティカレッジを毎年開催し、地域イベントの企画や参加を「学生サポーター」たちが行なってきました(豊橋での駄菓子事業など)。また、「とよがわ流域大学・流域講座」修了生の方々は、いわば「越境プレイヤー」として各地の地域づくりに関与してきました。この機能も大学単独では意味をもちません。三遠南信地域で統括的な「人材育成センター」を立ち上げ、人材バンク的な登録制度や資格の付与、事業資金の提供など、積極的な「地域経営人」の育成が今後ますます望まれるでしょう。

そういう新たなステップに向けて、連携センター5年の活動経験が活かされるよう留意して参りたいと念じてますが、ひとまず5年間の皆様の温かいご支援に改めて感謝を申し述べさせていただきたいと思います。

センター事業の取り組み状況

最終報告書のとりまとめに向けて

研究プロジェクト代表 佐藤 元彦

センターの基幹的プロジェクトである「グローバルな視点に立った『地域づくり』トータルシステムの開発」は、文部科学省・私立大学学術研究高度化推進事業(社会連携)としての5年間におよぶ補助期間がこの3月で終了し、現在、最終報告書のとりまとめに入っている。文部科学省への提出期限は5月末であるが、目下、以下の3分冊の形で最終報告書の作成が進行中である。

第Ⅰ分冊『地域づくりトータルシステム開発事業成果報告書』

第Ⅱ分冊『地域づくり情報システム整備事業報告書』

第Ⅲ分冊『東アジア国際交流ネットワーク整備事

業報告書』

最終的な研究成果の一部は、別に一般市民にも分かりやすくした形で刊行されているが(『三遠南信地域づくり読本』)、それを全体としてまとめ、研究の次の展開に結び付けていくためにも、研究成果の集約は重要である。最終報告書の一般出版物としての刊行は今のところ予定していないが、一部については英文に翻訳し、電子ジャーナル形式で広く海外に発信していきたいと考えている。今回の事業は、研究成果の集約により終了するというよりは、むしろ、研究成果をベースにグローバル時代の地域づくりに関する国際的な学術交流ネットワークを形成、拡充することが目的であるからである。

地域連携型GISの取り組み報告「地域づくり情報システム整備事業」まとめと今後の展望

事業責任者 蒋 湧

今年で事業は5年目を迎えた。5年の間に「地域づくり情報システム整備事業」は、「地域連携型GIS」研究プロジェクトを中心に、基幹システムの構築、基礎研究、GIS普及と人材育成、4つの側面から研究活動を行ってきた。

事業の初期では、基幹システムとして、分散型のGIS統合情報システムの研究と開発を行った。このGIS基幹システムは、データベース機能、GISコンテンツの開発、蓄積と管理機能、GISサービス配信機能を備え、システムの柔軟性、安全性と拡張性を重視した設計を進めてきた。これによって大学のGIS研究・開発、GIS教育と地域連携のための情報統合システムとして、情報プラットフォームの役割が期待できる。

基幹システムを利用した基礎研究は、主にGIS基盤データの整備に関する研究、基盤データを利用した空間解析に関する研究と、基幹システムを補完する地域のサブシステムの開発に関する研究、3つの分野に渡って研究活動を行ってきた。その成果は、研究論文、学会発表と研究活動報告書などで公表され

ている。

GISの人材育成・普及活動として、年に1回のGIS Day in 愛大のイベントを行っている。地域住民をはじめ、高校関係者や地元企業や大学教職員・学生など多くの方々が、GISの講演会や研修会を通して、GISに接する機会を提供してきた。また、GIS担当手の育成は、主に自治体職員の研修、高大連携、三遠南信地域連携センターの学生センターの活動、そしてゼミ活動を通して行われてきた。

5年間、関係大学、地域と関係企業を含め、様々な方々のご支援とご協力を賜り、本事業は計画通りの研究成果があげることができたと考えている。今後、地域に根差した研究として、GIS研究グループは、基幹システムの地域への拡張、学際的な空間情報解析と次世代の空間情報システムの開発、3つのテーマを持って、さらに研究活動を行う予定である。また、新学部の設立に合わせて、GISカリキュラムの確立とGIS学術士の資格認定にも積極的に取り組んでいきたい。

2009年度地域づくりトータルシステム開発事業報告

事業責任者 泰嶋 久好

地域づくりトータルシステム事業では、次の事業を行った。

1)文部科学省・私立大学学術高度化推進事業(社会連携推進事業)

研究助成の最終年度として研究成果のとり

まとめを行った。地域づくりトータルシステム開発事業の研究にあたっては、研究委員会を設置している。委員として協力いただいた方々は、国際連合地域開発センター、国土交通省、安城市、新城市、東栄町、下條村、NPO法人(3法人)、日

本システム開発研究所、東三河地域研究センター、愛知大学である。研究の成果は、「グローバルな視点に立った『地域づくり』トータルシステム開発事業研究成果報告書」の第Ⅰ分冊・地域づくり評価システムに関する研究としてとりまとめた。第Ⅰ分冊は、「地域づくりガイドライン」「地域づくり評価システム」「地域づくり読本」の三部構成で成果報告書にまとめている。

2)三遠南信地域づくり読本の発刊

三遠南信地域連携センター設立からの5年間にわたる地域との連携活動と地域研究の成果に基づき、『三遠南信地域づくり読本』を2010年3月に発刊した。執筆は、三遠南信地域連携センターの関係者によるものである。

3)東栄町との連携事業

三遠南信地域連携センターが関わった連携事業は、「東栄町元気なまちづくり事業」の推進として、「東薦目地区の活動」支援であった。2008年度に「東薦目地区の集落調査事業」を三遠南信地域連携センターが受託をした。2009年7月に集落調査の結果報告を行い、以後の活動として先ずは、東薦目地区の人達との交流会を行った。東薦目地区には、和太鼓プロ集団の「志多ら」が活動拠点をおき、国内、海外

公演を行っている。集落調査で知ることができたことの一つに「共住」施策がある。現在、国、県の地域振興施策として「交流居住居策」が打ち出されている。既に、東薦目地区では、若者たちの交流居住=共住を実践している。地区活動、祭り、行事に「志多ら」の方々が暮らしの中で支えている。

地域づくりサポーターが関わらせていただいた、12月の交流会も地区の一つの行事であった。これら東薦目地区との交流会は、連携事業としては小さな成果であるが愛知大学として継続的な活動提案と支援行動を示せるかが問われよう。

4)豊橋技術科学大学と愛知大学との連携融合事業

4年目の事業としては、「人材育成・意識啓発アクションプログラム開発部会」に所属している。6月、8月には政策部会との研究会、7月には人材育成・意識啓発アクションプログラム開発部会を開催した。9月には、岩崎正弥教授が日本不動産学会(豊橋技術科学大学にて)において「地域力からみた都市・中山間地域連携」をテーマとして発表した。部会の補足的な調査として、東栄町の地域コミュニティづくりと人材育成に関して実施をした。

教育・人材育成事業報告

事業責任者 岸本 恵次郎

(1) 2005年度の「とよがわ流域大学」からはじまった豊川流域圏づくり事業は、3年度にわたる流域大学・流域圏講座の実施、2006年度からつづく共同提案事業、2008年度の愛知県委託事業と多彩な活動を展開してきた。連携センターは、行政、民間団体と連携して事業を推進するとともに、市民・住民の活動を支援、協力してきた。まだまだ十分なものといえないものの地域におけるプラットフォームとして、各種機関・団体をネットワーク化し、情報、知的資源、施設等の提供を通じて支援を行ってきた。

2009年度共同提案事業を推進してきた3グループは、作業、観察、清掃、調査、聞き取り、交流などを含む幅広い活動、イベントを企画、実施してきた。それぞれのグループは、今後も活動の継続を考えており、大学としての支援のあり方、地域プラットフォームの機能をいかに発揮していくかを考えいく必要がある。

(2) 三遠南信コミュニティカレッジは、「豊川流域圏づくり」連携事業にはじまり、「みち」、「まつり」、「鉄道」と三遠南信の地域資源、地域文化の掘り起こしと交流をすすめてきたが、2009年度は「食」をテーマに農業先進地域の課題、「農商工連携」事業の展望、「食」の安全、地域づくりと「食」など多方面にわたって考える講座を実施し、報告書にまとめた。今後の課題としては、コミュニティカレッジで明らかとなった課題をどう深め、地域づくりにかかる活動につなげていくかを考えていくことであろう。

(3) サポーター活動は、ときわ通り「逸品館」、こども未来館で出店してきた駄菓子販売と野菜販売を軸に活動を展開してきたが、12月26日に最終日を迎え、8ヶ月にわたる活動を終えた。しかし、サポーターはそれに加えてときわ通りをPRするキャンドル・ナイトを1月16日に開催し、多くの豊橋市民にときわ通りの存在を訴えた。また、2月13日にはこども

未来館で「サポーター活動報告会」を開き、2009年度の活動のまとめを行った。本年度のサポーター活動は、上記以外にも夏のチャレンジショップ、売木村秋色感謝祭への出店・ジャンボ五平餅づくり、七郷一色地区の納涼祭り・体育祭り、奈良での学生地域づくり活動発表を行い、サポーター全員がそれぞれの力を発揮しており、今後大学と地域、学生と地域の問題を考えるうえで貴重な経験を蓄積できたといえよう。

(4) 七郷一色ウィークエンドセミナーは、技科大と新城市との連携事業として4年間継続して開催してきたが、2010年度は最終年度を迎える。また、2009年度東三河生物多様性推進事業では穂の国エコカレッジ第1年目を開講し、50名を超える受講生が10回の講座・フィールドワークに熱心に参加した。2010年度は、エコカレッジ2年目を開催するとともに、COP10開催年事業を予定している。

センター・トピックス

公開シンポジウム「GISが育てる人材とは—大学・地域・国際協働—」を開催

2010年2月27日(土)、13時30分より、本校車道校舎にて、自治体職員、教育関係者やNPO活動家を対象に、「GISが育てる人材とは」と題した、公開シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、センターにおけるGIS関連事業のまとめの1つとして位置づけ、本学におけるGISの取り組みの報告と、GISを取り巻く人材を切り口として、地域や大学のGISに関わる分野の第一線で活躍する3名からご講演と、センターの取り組みの評価、及びアドバイスをいただいた。

第1部では、東京大学空間情報科学研究センターの今井修教授より、「市民参加型活動とGIS」をテーマに、防災ボランティアが社会的に認知されはじめた頃のGISを利用した情報発信、そして現在の地域SNSでのGIS活用など、市民参加型GISにおけるプロセスの重要性の指摘や、今後のGIS学習や育成政策、行政や専門家の役割について解説いただいた。

次に、筑波大学大学院生命環境科学科の村山祐司教授から、「大学のカリキュラムとGIS」をテーマに、世界的なGISの動向と、ツールを越えた役割を持つGIS

といった、GISをめぐる最近の動き、そして大学におけるGISカリキュラムの構築と資格認定について紹介いただき、学内連携の強化や体系的教育の必要性、大学間コンソーシアムの構築、地域社会との関わり強化、日本独自のGIS教育の推進といったキーワードの提示をいただいた。

慶應義塾大学環境情報学部の厳網林教授から、慶應SFCにおけるGISカリキュラムの紹介と、その中の学生の学習成果の具体的な事例を紹介いただき、総合政策・環境情報という学際領域におけるGIS教育と研究について、チームでの取り組みの重要性、協働のプラットフォームとしてのGISの位置づけ、今後、協働による社会サービスを



創出するようなGISの可能性を提示いただいた。

第2部では、事業責任者の蔣湧教授が、これまでの基幹システムの構築と、それをベースとした基礎研究、またGIS普及と人材育成の一環としてのGISDayや高大連携の取り組み、GISを用いた地

域研究と国際連携への展開を含めた、センターにおける地域連携型GISについての報告を行った。

さらに、蔣教授の報告を受け、佐藤学長のコーディネートにより、3名の講演者と蔣教授をパネリストに、GISと地域連携を主なテーマとして、参加者の意見も踏まえながら討論会を行った。

そこでは、自治体等でGISが必

須とされる場面での、GIS利用と開発に携わることのできる人材や予算の不足と、そこで大学が「情報の共有」や「学生の輩出」と「学び直し」の機会を提供できるという指摘があった。また、市民活動とGISにおいては、必然性はないが未来創造のような「楽しさ」を如何に増やしていくのか、そこにはGISツールを活用し

たプロセスの重要性、そして、大学がいわゆる地域のファシリテーターを育成できるのではないかという提言があった。

今回のシンポジウムでは、今井教授、村山教授、巖教授、そして参加いただいた皆様から、貴重なアドバイスをいただくことができた。深く感謝を申し上げる次第である。

『三遠南信地域づくり読本』の刊行

この3月に『三遠南信地域づくり読本』を刊行(定価1500円で市販)する運びとなった。これまでの連携センターの、主として地域づくり支援活動に関する総括である。内容は2部構成で以下の通りとなっている。

第Ⅰ部 地域を知る

第1章 三遠南信の地域的特徴／第2章 日本の国土開発政策と三遠南信／第3章 三遠南信の地域づくりの動き／第4章 <知る>手立てとしての評価手法

第Ⅱ部 地域を育てる

第5章 地域を育てる理念／第6章 <育てる>手法の検討／第7章 学生による地域づくり活動の意義／第8章 <地域づくりプレイヤー>の育成／補論 ツールとしてのGIS活用

「地域を知り、地域を育てる」が私たちの地域づくりに対するコンセプトである。そのために大学ができるることは何なのか。この間、連携センターでは、三遠南信

という3県境を跨ぐエリアを対象に、その特徴を調べるだけにとどまらず、行政やNPO団体とも協力しながら、地域力点検を実施し、先進事例の調査をし、また学生やコミュニティカレッジ修了生たちが各地の地域づくりに関わってきた。こうした経験を通して学んできたことを、今回「地域を知る、地域を育てる」として整理したものである。

とくに地域を育てるプレイヤー、サポーターという人づくりの重要性を問題提起している。

いわゆるノウハウ集ではない。むしろ三遠南信に関心のある人

たちや、行政や民間を問わず地域づくり現場で活動をしている人たちが、一旦立ち止まって、三遠南信エリアや地域づくり自体を問い合わせに来なければと願っている。

生物多様性条約COP10へむけて加速するESD:「COP10・グローバルESD対話集会」

今年10月に、生物多様性条約第10回締約国会議およびカルタヘナ議定書第5回締約国会議が愛知県名古屋市で開催される。

この地域では、2005年の愛・地球博を機に「自然の叡智」に対する意識が高まったが、その後も各団体により地球規模の社会的

課題を私たちの生活に引きつけて考え行動しようといった試みが続けられてきた。そのひとつが、「持続可能な開発のための

教育」(ESD)を推進するモデル地域として国連大学により認証された中部ESD拠点であり、学生センター活動やとよがわ流域づくりを通じてESD経験を蓄積してきた愛知大学三遠南信地域連携センターも同拠点に加盟している。

ESDに期待される教育のあり方は、大学を含む学校教育と地域経済の再生やまちづくりといった市民や企業が行う学校外教育との相互連携である。これを実現すべく1月24日(日)には、中部ESD拠点により「COP10・グローバル対話集会」が中部大学で開催され、100名を超える多くの参加者が来場した。その開催主旨は、ESDの国際的ネットワークを構築することで、COP10に向けて多様性ある提言集をまとめることである。

阿寒アイヌ民族村専務理事・秋辺日出男氏は、「イランカラブテー」という言葉で基調講演を切り出した。アイヌの言語で、「あなたの心にそっと触れさせてください」という意味のあいさつ言葉である。またアイヌ民族は、

川は海から入って川上へと上るものという思想をもっていると、秋辺氏は語る。同じものに対してまったく異なる世界観を築く人と人が尊重しあうことが、COP10を成功に導くカギである。そしてそれを実現するうえで、ESDは重要な役割を果たすのだと再確認した。

続くパネルディスカッションでは、「先住民族の知識・知恵と地域社会の暗黙知—COP10に向けて」というテーマの下、次のような議論が展開された。自然の叡智・恩恵を享受することで私たちのコミュニティはうまれ、保護されてきた。そのコミュニティに蓄積される生活の知恵は、文字化されていないいわば暗黙知である。そうであるにもかかわらず、私たちは今日、可視化されたものにばかり価値を見出す。自然に対する畏敬の念を失ったことが、現代社会の抱える問題の本質ではないだろうか。「自然に保護されている」ことを自覚した自律的生活システムをめざすべきであろう。

ランチセッションでは、自然の

恩恵を享受するというコンセプトを頭だけでなく五感で体験できた。スーパーや町の魚屋ではなかなか目にすることのない伊勢・三河の幸を食することで、私たちの生活基盤を実感できたこともESDには不可欠な要素である。さらに、「自然を守る」から「自然に保護されている」との意識転換と同時に、気候変動にともない食材の変化に対応する柔軟性が求められているのかもしれない。

世界各地でみられるこうした身近な変化に注意を払い、それぞれのESD拠点が報告しあうことで情報共有をはかる。午後の討論では、COP10へむけて世界中のESD経験を発信するために、各拠点同士が今回のような対話集会にとどまらずインターネット上で対話を継続することが確認された。会場では愛大OBの方から声をかけていただいた。「私たち一人ひとりが、政府間協議の場であるCOP10に対して声をとどける術を知った」との言葉には、半年後に迫ったCOP10へつながるESDの解法が暗示されたようだった。

東栄町東薦目地区との交流会

東薦目地区は、静岡県浜松市(旧佐久間町)と境を接し、33戸、100名の集落である。2008年度「東栄町元気なまちづくり推進事業調査」を受託し、東薦目地区で集落調査をさせていただいた。調査の目的は、元気なまちづくり(東薦目の地域づくり)を推進するための「地域の力」を点検することであった。調査を通じて学んだことは、“共住”という施策であった。確かに東薦目地区も高齢化が進んでいるが、和太鼓集団である「志多ら」の皆さんのが地区活動、集落維持に関わっており、

“共住”的な相互関係ができていることであった。「志多ら」は、本居地を旧東薦目小学校におき、地元での公演、国内、海外公演を行っている。地元東薦目地区での“共住”的な参加例を挙げれば、地元の祭りである花祭りの運営、地区内の葬儀、共同作業、毎朝の組内一周のランニングを兼ねた各戸への気配り、地区外との交流会の支援等日々の暮らしの中で展開している。

2008年度の東薦目地区の調査には、三遠南信地域連携センターの地域づくりサポーター

があたった。地区の行事である花祭りの手伝いをさせていただいた。2009年度は、調査結果に基づき東薦目地区での事業活動を行うために地域づくりサポーターが、CS班(コミュニティ・サポート班)をつくり活動態勢をとったが事業としての交流会は後半でのスタートであった。初回での交流会のねらいは、学生ー地区的高齢者ー志多らの若者ー地元の子供が入り混じって地区の高齢者から、こんにゃく、五平餅、けんちん汁等の郷土料理作りを教わり、共に作り、食事・談話をするこ

とで、顔合わせの機会をつくることにあった。次年度の「元気な東薈目の地域づくり」のCS活動と

して繋げたい。東薈目での交流会は、冷たい風が吹く日であったが、地区の人達との温かな出会い

いの中で、12月13日に行われた。



地域づくりセンター活動報告会を開催

去る2月13日、こども未来館研修室にて今年度の「地域づくりセンター活動報告会」が開催された。当日は、活動中にお世話になった方々だけでなく、かつて地域づくりセンターとして活動に参加していた卒業生にもご来場いただいた。

報告会は、まずセンター代表による本年度活動に関する概要報告から始まり、その後第1部として、①長野県壳木村での新米まつりへの参加報告、②愛知県東栄町東薈目地区で行った交流会報告、③豊橋駅前で開催したキャンドルナイトイベント開催報告、④サマー・カレッジチャレンジショップ企画運営報告、⑤新城市七郷一色地区での体育祭参加報告、⑥奈良県立大学で開催された「学生の地域創造 IN NARA」への参加報告の6つの活動報告が行われた。報告終了後には、キャンドルナイトイベントで大変お世話になった豊橋市役所都心活性課の方から、各活動に対するコメントをいただいた。

続く第2部では、今年度のセンター活動の基軸でもあった「駄菓子事業」と「CS事業」の2事業

について、各事業の代表センターから報告が行われた。これらの事業はセンターが全員で取り組み、各方面から高い評価をいただいた活動である。事業を立ち上げた経緯や活動内容、また途中発生した問題やそれに対する対応、今後の課題などが報告された。第2部の最後には、この2つの事業に関して大変お世話になった豊橋まちなか活性化センターの方や

ときわ通り商店街の方、こども未来館の方から活動に対する貴重なご意見をいただいた。

今回の報告では第1部、第2部ともに、各報告者が目的や活動内容、課題や今後の展望などを報告している。よってセンター



たちは今年度の活動に対して、受身で参加していたのではなく、常に高い目的意識を持って活動に取り組んでいたことが理解される。

また、報告会の内容構成の企画や会場内レイアウトの作成、当日

の会場設営や機材セッティング、受付、司会進行役など、あらゆる業務をセンター自らで企画し運営したこと、これまでの報告会とは大きく異なる点である。当然、コメントを依頼した方々へ

の出席交渉などもセンター自身で行っており、このことが「自分たちの報告会」という意識を強くし、報告内容の作成にも意欲的に取り組むことができたと考えられる。

これらの経験を糧に、また、いたいた貴重なご意見を生かしていけるような、センターたちの今後の活動への取り組みに期待したい。

2009年度共同提案事業報告会を開催

2010年3月13日に2009年度豊川流域づくり共同提案事業の報告会が開催された。共同提案事業は、前年度愛知県委託事業に採択され、活動してきた3グループが継続して活動を展開してきたものである。

まいパンク協議会は、「水の辯の再生をめざす環境保全活動と交流推進事業」をテーマに、新城エコファーマー、梅田川フォーラム、豊川・渥美・前芝フォーラムの3種のプロジェクトで環境保全・調査、農作業等の活動を多角的

に行い、上下流交流と地域づくりを展開してきた。

豊川流域研究会は、「人と人が寄り添うまちづくり—豊川市当古地区ー」をテーマに豊川中流域の霞提と共生してきた当古町のお年寄りから聞き取り調査を行い、地域づくりへの課題を探った。

豊川リバーウォーク準備委員会は、「リバーウォークみんなで歩こう豊川」をテーマに、前年に作成した豊川リバーマップを検証するウォーキングを行い、そのうえに立って上流域、下流域各1コ

ースのリバーウォークを開催した。

報告会では、3グループからスライドを使ってその多彩な活動が報告された。3グループはそれぞれ地域づくりプレイヤーとして着実な成長を刻んでおり、「地域経営人」といっても過言ではないとの思いを強くした。

報告会のあと、懇談会が開催され、参加者からこれからの豊川流域づくりへの熱い思いが語られ、大学として、その期待に応える必要があることを痛感した。



地域づくりセンターの活動から

駄菓子屋「だがしかん」の活動を終えて

私は駄菓子屋事業の代表になった時、この事業を進めていく上で自分自身の目標をたてようと思いました。その目標は「この活動を終えたときに、メンバー全員が駄菓子屋事業に参加して良かったと思える活動にする」というものです。たしかに、駄菓子屋事業本来の目的である、こども達の

遊び場の創出や多世代間交流を達成することはとても重要なことですが、それ以上に地域づくり活動を行うセンターが活動を通じてなんらかの達成感を得られなければ、このセンター活動の意義自体が無くなると感じたからです。

このような目標を設定したも

経済学部3年 乙部 篤史

の、学生主体で地域づくり活動をするのはやはり大変なものでした。まず、コミュニケーションをとることの難しさです。最初は、チラシ配りをする時や、こどもたちが来てくれた時にどのようにコミュニケーションをとっていいのかが分からず、センター全員が戸惑っていたように思います。

この部分は営業を重ねるにつれて慣れていき、こどもたちや来店者とのコミュニケーションは円滑になっていきました。しかし、達成できなかったコミュニケーションもいくつかありました。それはときわ通り商店街の方たちとのコミュニケーションです。サポートの中にはどうやって商店街の方とコミュニケーションをとっていいのかがわからず、積極的に話しかけていく機会がとても少なかったように思います。代表としてもっと商店街の方に話しかけて、ときわ通り商店街を盛り上げるアイディアを出しあう場を設けてもよかったです。

他にもいろいろと課題点はありました。活動を終えて最後の運営会議を行ったときに、参加したすべてのメンバーがだがしかしん活動を通じて何らかの達成感

を得ることができ、自分自身が成長することできたと話してくれました。しかし、だがしかしんの活動は商店街や地域に何か影響を与えることができたのかを考えた場合、個人的な意見ですが、それは商店街や来てくれた方たちに判断を任せたいと思っています。ただ、ひとつだけ言えることは、だがしかしんに来てくれた方が、将来「そういえば、昔、ときわ通りで大学生が駄菓子屋をやっていた時期があったな。今度久しぶりに商店

街へ行ってみるか。」と考えてくれる人が多ければ多いほど、私達の活動は有意義なものであったといえるのではないかと思います。



野菜販売活動を終えて

野菜販売が昨年6月半ばにスタートしてから、慣れない接客と野菜の扱い・知識不足などに苦戦し、初めの頃はただひたすらがむしゃらに野菜販売というものに取り組んでいただけでした。「中山間地域の水源地保全」という目的は地元NPOと共通でしたが、当初、野菜販売を行うことが水源地の保全に繋がるという理論が正確に理解できずにいたこともあり、目的意識を持ち活動するということがまだその頃の自分にはあまりありませんでした。そこで運営会議で水源地保全のしくみについて議論したり、先生にも説明を受けたりしてサポートなりの水源地保全のしくみについて解釈を導き出しました。

野菜販売を通して気づいたことは、目的を意識しながら活動を

行うことの重要さです。目的を意識して活動した場合とそうでない場合、自分にとってその活動の意義に違いが表れます。目的意識を持って活動した場合、その日一日の反省をしっかりと行えると同時に、次回活動への目標も明確になり、また、取り組みに対する姿勢にも違いがでてくると思います。そのため、野菜販売の途中からは、活動を行う毎に活動報告書を作成することにしました。その頃から、サポートの野菜販売に対する姿勢にも少しずつ変化が表れるようになったと感じています。野菜販売に限らず、何か物事に取り組む際にはこのことが大変重要なことを実感しました。

また、駄菓子と野菜の共同営業に関していえば、その意義は

経済学部4年 近藤 由衣

やはり多世代間交流であると思います。駄菓子のみで営業していたら、やはり子どもを中心とした客層になるだろうし、野菜のみの場合であれば、客層は年代が高めになると思われます。駄菓子と野菜を分けてしまうよりも共同営業の方が同じ空間に異なる年代の人が集まり、目的とする多世代間交流の可能性が広がります。しかし、同じ空間に異なる年代層を集めることはできましたが、異なる年代のお客さん同士の交流というものがあまりなかったように感じました。サポートと子ども、サポートと大人間のコミュニケーションは営業やイベントを通じて図れたと思いますが、多世代間交流の実現とまではいかなかったように感じています。今後、世代を超えた

交流の場づくりを目指すために
は、多世代の人を集めた後どう

するのか、さらにもう一步進んだ
取組みを行っていく必要がある

ように感じました。



ときわ通りPRイベント～キャンドルナイト in TOYOHASHIを開催して

文学部3年 吉開 仁紀

ときわ通り商店街での駄菓子屋「だがしかん」の活動は、8カ月という短い期間ではありました。活動を通して商店街の人たちの温かさ、優しさ、商店気質溢れる活発な面にふれることで、私たちは商店街の多様な魅力を発見してきました。それに反して、駄菓子屋を認知してもらうために行ってきましたチラシ配りなどの広報活動を通じ、ときわ通りに関心の無い人や、ときわ通りの名前さえ知らない人が沢山いることも多く感じていました。そこで、ときわ通り商店街の認知度や魅力を発信するためには何ができるのかを考え、1月16日に、豊橋駅前南広場で「ときわ通りをPRすること」を目的として、キャンドルナイトイベントを実施しました。

今回、都心活性課から開催承諾を得た12月下旬から、豊橋駅前の商店街、スーパーを中心にキャンドル製作に必要な廃油や2リットルペットボトル、空き瓶や発泡スチロールの材料集めに奮闘しました。しかし、材料が思うように集まらず、計画通りにキャンドル製作が進まない状況で、途中幾度となく、目標である400個のキャンドルを製作することは、不可能なのではないかと思う時

もありました。しかし、地域づくりサポーターのメンバーやキャンドルナイト開催の考えに賛同し、臨時に結集してくれた愛大生の力に助けられ、実施日までに、目標を越える420個のキャンドルの製作にこぎつけることができました。

迎えた当日は予想を超える強風で、キャンドルが上手く固定できないアクシデントに見舞われましたが、開催時刻までに何とか、全てのキャンドルを配置することができました。設置したキャンドルの光で広場には幻想的な空間が作り出され、駅前行きかう人々の足を止めさせることができ、またキャンドルと共に設置したときわ通りの風景を写したパネルや、商店街の風景を写したスライドショーを流すことで、ときわ通りの良さを多くの人に訴えかけることもできました。広場に無数に



揺らめくキャンドルに目を奪われ、歓声を上げる多くの人の姿を見る事ができたほか、スライドショーやパネル展示にも多くの人に興味関心を持っていただくことができ、成功の手ごたえを感じることができました。

しかし、ときわ通りに人が流れれる仕組みを作るには、今回のようなイベントを一ヶ所だけで行うのではなく、駅前、ときわ通りと同時に、連動してときわ通りに足を運ぶ仕掛けづくりをすることが

必要ではないかとも感じました。また、そのためにも、商店街の更

なる魅力作りも必要なのではないかと思いました。

「学生の地域創造 IN NARA」に参加して

大学院 経済学研究科2年 村田 裕志

去る12月5日と6日の2日間、奈良県立大学において「学生の地域創造 IN NARA」が開催され、地域づくりサポーター4名が参加しました。

これまで私たちは、地域で活動をしている学外の大学生との交流があまりありませんでした。そこで、このような機会を通し、他の活動を把握し、他大学の学生と交流することで、地域づくりに関する知識だけではなく、新たな活動への刺激を得られることを期待し参加しました。

1日目には、各分科会での個別の活動報告と意見交換会が行われ、また交流会も開催されました。私達は第4分科会「市街地における地域活動」に組み込まれ、駄菓子販売、野菜販売のことについて報告を行いました。その後、東海大学の学生が司会となって学生の地域づくりに関する成果や課題に関する意見交換会が行われました。また、夕方からの交流会では、奈良市のバサラ踊りを鑑賞するとともに、実際に体験することもできました。

2日目には、一人ひとりがグループに分かれ、奈良市のベッドタウン

の問題や観光問題に対する政策立案ワークショップを行いました。例えば私が所属したグループでは、ベッドタウンを良い方向に捉え、むしろベッドタウン化を推し進めることで、市民が生活しやすいまちづくりができるのではないかという方向性で政策を提案しました。また、観光客の減少が問題となっていることについては、神社、仏閣が非常に身近な存在となっている奈良市の風土を生かした上で、そのような奈良市の持つ風土を全ての観光客が満足できるような、年齢別の観光プランの作成を提案しました。

今回の「学生の地域創造 IN NARA」では、全国各地から地域で活動を行っている大学生が集まりました。このような小さなネットワークが集ま

ることで、全国的なネットワークへと規模の拡大が図れるのではないかと思います。そして、大学生がプレイヤーとなって情報を発信、受信することで、色々な地域の魅力を全国に発信することが可能となり、人々が地域へ関心を向けるきっかけづくりになるのではないかと感じました。



△△△△△ 三遠南信地域連携センター活動記録(2009.11~2010.3) △△△△△

月	日	曜日	研究室・委員会等名	会場	出席者・概要
11月	1日	(日)	平成21年度壳木村秋色感謝祭・新米まつり	長野県下伊那郡壳木村ふるさと館	岸本、鈴木 地域づくりサポーター(磯野、大島、乙部、木村、竹内、平井、村田、吉開)
	7日	(土)	2009年度共同提案事業「リバーウォーク みんなで歩こう豊川」ウォーキング	上流域・設楽エリア	岸本参加
	8日	(日)	三河コンヴェンションアカデミー第18回ウィークエンドセミナー	新城市鳳来地域間交流施設	「みんなで歩こう豊川」で結ぶ上下流交流」～住民主体の豊川流域づくりの推進～ 箕美氏・高木松生氏・鶴飼一之氏(愛知大学とよがわ流域大学修了生 豊川リバーウォーク準備委員会)
	13日	(金)	三遠南信サミット2009in東三河	ホテル日航豊橋	GIS事業のパネル展示を行った他、センター長が「技」分科会でコーディネーターを務めた。 参加:佐藤学長、センター長、蔣、黍鳴、岸本、山本、暁、鈴木
	14日	(土)	2009年度共同提案事業「リバーウォーク みんなで歩こう豊川」ウォーキング 平成21年度環境省補助事業(COP10パートナーシップ事業) 穂の国エコカレッジ第5回:フィールドワーク	下流域・豊橋エリア 豊川・音羽川	
	19日	(木)	運営委員会(09-12)	センター事務室	

月	日	曜日	研究室・委員会等名	会 場	出席者・概要
	19日	(木)	第8回がんばる市町村職員塾	(研修会) 豊橋市民センター	センター長が共催者挨拶を行う 大学生による地域への取組みについての報告 (1)地域づくりサポーター活動について 地域づくりサポーター村田 (2)駄菓子や販売活動について 地域づくりサポーター乙部 (3)野菜販売活動について 地域づくりサポーター大島・近藤 (4)まとめ RA鈴木 地域づくりサポーター(大橋、竹内、平井、堀田) 逸品館の視察対応
	20日	(金)	公開講演会「豊橋・東三河の雇用事情～派遣問題と就労支援の実態～」	研究館1階 第1・2会議室	○スピーカー ・竹内晴夫氏(経済学部教授)「日本の雇用の現状～派遣労働」 ・高島史弘氏(立協カボラティア豊橋サマリヤ会代表、豊橋派遣村実行委員会委員長)「ホームレスと派遣村の実態」 ・山元 桂氏・小野田美紀氏(NPO法人外国人就労支援センター)「外国人就労支援活動の実態」
	26日	(木)	運営委員会(09-13)	センター事務室	I. 獣害と奥山生態系(愛知県自然環境課)
	28日	(土)	平成21年度環境省補助事業(COP10パートナーシップ事業) 穂の国エコカレッジ第6回:穂の国の生き物	本館5階 第3・4会議室	II. 豊川の生態系の変化 講師:小山舜二氏(元県水産試験場)
12月	1日	(火)	県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン幹事会	豊橋商工会議所	センター長、黍嶋、田邊
	5日	(土)	「学生の地域創造 IN NARA」	奈良県立大学	鈴木、地域づくりサポーター(大島、乙部、近藤、村田)
	6日	(日)			
	10日	(木)	運営委員会(09-14)	センター事務室	
	12日	(土)	平成21年度環境省補助事業(COP10パートナーシップ事業) 穂の国エコカレッジ第7回:穂の国の産業	本館5階 第3・4会議室	I. 東三河の漁業 講師:中村元彦氏(県水産試験場主任研究員) II. 奥三河の林業の歩み 講師:森田 実氏(穂の国森づくりの会事務局長)
	13日	(日)	東栄町東薗目地区交流イベント	東栄町東薗目地区	センター長、黍嶋、鈴木、地域づくりサポーター(磯野、大島、大谷、大橋、清川、近藤、木村、中村、平井、堀田、吉開、村田)
	19日	(土)	平成21年度環境省補助事業(COP10パートナーシップ事業) 穂の国エコカレッジ第8回:フィールドワーク		林業体験・間伐等
1月	7日	(木)	運営委員会(09-15)	センター事務室	
	16日	(土)	平成21年度環境省補助事業(COP10パートナーシップ事業) 穂の国エコカレッジ第9回:フィールドワーク		穂の国の地質・岩石 講師:横山良哲氏(元鳳来寺山自然科学博物館館長)
	21日	(木)	運営委員会(09-16)	センター事務室	
2月	12日	(金)	運営委員会(09-17)	センター事務室	
	13日	(土)	平成21年度環境省補助事業(COP10パートナーシップ事業) 東三河生物多様性セミナー 2009年度サポーター活動報告会	名豊ビル 7階ホールAB こども未来館(ここにこ) 2階研修室A・B	岸本出席 センター長挨拶 2009年度サポーター活動を振り返って 大島あすか ・各種活動報告 ①秋色感謝祭・新米まつり 木村雄二 ②東薗目地区交流イベント 磯野健太 ③ときわ通りPRイベント・キャンドルナイト in TOYOHASHI 吉開仁紀 ④スマーカレッジチャレンジショップ2009 竹内千晶 ⑤七郷一色体育祭 平井志奈 ⑥学生の地域創造 IN NARA 村田裕志 ⑦駄菓子屋事業 乙部篤史 ⑧CS事業 近藤由衣 ・今年度活動についてのコメント 岸本、RA鈴木より
	26日	(金)	運営委員会(09-18)	センター事務室	
	27日	(土)	公開シンポジウム『GISが育てる人材とは 一大学・地域・国際協働―』	車道校舎 第3会議室	第1部 挨拶・特別講演 ・学長より挨拶 ・市民参加型活動とGIS 今井 修氏(東京大学 空間情報科学研究センター教授) ・大学のカリキュラムとGIS 村山祐司氏(筑波大学 大学院生命環境科学科教授) ・学生による地域活動とGIS 岩綱林氏(慶應義塾大学 環境情報学部教授) 司会進行:センター長 第2部 事業報告・意見交換 ・愛知大学における地域連携型GISの取組 菊 ・GIS人材育成の役割についての意見交換 ハリス・今井 修氏(東京大学 空間情報科学研究センター教授) ・村山祐司氏(筑波大学 大学院生命環境科学科教授) 岩綱林氏(慶應義塾大学 環境情報学部教授) コーディネーター:学長
3月	4日	(木)	豊橋駅前さくら通りワークショップ	カリオンビル	地域づくりサポーター村田が出席
	5日	(金)	県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン第4回公開シンポジウム 広域連携による地域づくり戦略とマネジメント 都市・農村・中山間を一休する広域持続性確保に向けて	ホテルアソシア豊橋	センター長、蔣、黍嶋、岸本、暁が出席
	11日	(木)	運営委員会(09-19)	センター事務室	
	13日	(土)	2009年度豊川流域園づくり共同提案事業報告書会 女性農業者と消費者の懇談会	6号館622教室 本館5階第2会議室 豊橋市職員会館4階	挨拶:センター長 第1部:活動報告 (1)「水の命をめざす環境保全活動と交流推進事業」(豊川流域園通貨バンク協議会) (2)「人と人とが寄りそむちづくり-豊川市當古地区-」(豊川流域研究会) (3)「リバーウォークみんなで歩こう豊川・プレミニイベント」(豊川リバーウォーク準備委員会) 第2部:懇談会 地域づくりサポーター磯野・大島が消費者の立場として意見交換を行う。
	18日	(木)	豊橋駅前さくら通りワークショップ	カリオンビル	地域づくりサポーター村田が出席
	25日	(木)	県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン平成21年度第2回幹事会 平成21年度成果報告会	ホテルアソシア豊橋	センター長、黍嶋、田邊が出席 センター長が研究会副会長として挨拶、黍嶋が人材育成・意識啓発アクションプログラム開発部会長として成果報告を行った。

編集後記

2010年2月13日こども未来館ココニコ2階にて今年度の活動報告会があり、報告は8名の学生サポーターからそれぞれの活動状況について、パワーポイントを使用し、進められた。

活動目的は、学生の目標で商店街等の活性化の一躍を担うことであったが、勉学の合間に活動であったことから、時間的な問題もあり充分な成果とは言いがたい印象を持った。

報告の最後に「課題」として諸点が報告され、その解決への糸口など、活動を通して若者の目標で示されればとも感じた。大変難題であるが……、

最後に、三遠南信地域連携センターは、2004年10月に設立され、2005年度から5年間、文部科学省学術研究高度化推進事業に採択され活動してきた。この活動はその都度センターニュースに掲載し紹介した。この事業も本年3月に終了することとなり(ただし現在GISを中心とする新たな研究プロジェクトを文科省に申請中)、非常に残念である。このニュースも今後は未定であるが、いずれにしてもこの経験がさらに生かされることを期待したい。ありがとうございました。

表紙写真:新城・四谷の千枚田

編集・発行

愛知大学三遠南信地域連携センター運営委員会

〒441-8522 愛知県豊橋市町畠町1-1

Tel : (0532)47-4157 Fax : (0532)47-4576

URL : <http://taweb.aichi-u.ac.jp/sen-center/>

Email : sen-center@ml.aichi-u.ac.jp

発行日 : 2010年3月31日